

## 2025 年秋季研究発表会（関西学院大学）を終えて (H. Miyashita) [J]

今回 9 年ぶりに独文学会阪神支部が秋研究発表会の当番となり、10 月 18 日・19 日に関西学院大学（以下関学）で秋季研究発表会が開催された。他の多くの支部と異なり、「支部」という名称は実は阪神支部の多くの会員にとっては日頃なじみのないものである。『阪神ドイツ文学会規約』の第 2 条に「この会は日本独文学会阪神支部を兼ねる」と定められているように、通常は「阪神ドイツ文学会」として活動を行っている。この名称の方が実感に合っているため、以下ではこちらの名称を用いることをお許しいただきたい。

今回の会場校となった関学で日本独文学会の研究発表会が前回開催されたのは 1998 年 10 月 17 日・18 日のことで、じつに 27 年ぶりの開催であった。当時のスタッフは文学部にはもはや誰も残っていない中、それほど不安なく準備を進めることができたのは、なんといっても阪神ドイツ文学会の組織力のおかげである。独文学会から秋学会の当番の話が来た際には、2025 年 4 月まで阪神ドイツ文学会の会長を務められた高井絹子さん（大阪公立大学）が実行委員長となり、当時の幹事会のメンバーを中心に、実行員会が組織された。その後、実行委員長は会場校担当でもある宮下が引き継ぎ、最終の準備をすすめることになった。この実行委員会は総勢 14 名というぜいたくな委員会で、メンバー構成は以下の通りであった：宮下博幸（関西学院大学・実行委員長）、芹澤円（神戸大学）、信國萌（大阪公立大学）、香月香里（岡山商科大学）、児玉麻美（奈良女子大学）、吉村淳一（滋賀県立大学）、小川敦（法政大学）、北岡志織（大阪大学）、柏木貴久子（関西大学）、千田まや（和歌山大学）、細川裕史（阪南大学）、中村綾乃（大阪大学）、孟真理（神戸女学院大学）、高井絹子（大阪公立大学）。これだけ多くの経験豊富なメンバーがいれば、分担さえしっかり決めれば問題なく乗り切れるであろうと、当初より安心することができた。

実行委員会で学会開催を検討していくうえで問題となるのは、お金がからむところである。まず参加費の支払いをどの方式にするかを決める必要があった。春の中央大学の研究発表会では再び当日現金払いが復活したものの、アルバイト代の節約や金銭のやり取りの最小化という利点から、熊本学会に倣い、Peatix によるオンライン決済で徴することにした。この数年でオンライン決済がますます普及していることもあるからか、228 名の参加者のうち、75%を超える 175 名に事前決済で支払っていただくことができた。

また懇親会は、特に頭を悩ませるところである。関学は大学近辺で懇親会が可能な施設は関学会館一択なので、その点は悩む必要はなかったが、価格設定が高めのため、懇親会費もかなり高くなることが予想された。最終的に多少の赤字覚悟で一般 8,000 円、学生 4,000 円とさせていただいたが、結果は思いのほか盛況で、学会参加者の半数以上の方に参加いただくことができ、なんとか赤字を免れることができた。会場は人数からすると多少手狭ではあったものの、その分アットホームな雰囲気を作り出されたかもしれない。

以上のようにお金のからむところは首尾よく進み、また役割の分担に従い、それぞれが自立し、また時には協力して、各自の持ち場で慎重かつ効率的に働いていただいた。最後には

まるで学園祭を行っているかのような気分の中で研究発表会を終えられたように感じている。また来場いただいた方にも、おおむね満足いただくことができたと思う。

私は研究発表会初日はシンポジウムへの登壇で事務局に不在、また二日目の午後は研究会での共同発表で不在と、実行委員長という立場としては甚だ無責任な状況であったが、このようなことが可能であったのも、以上のような信頼のおけるメンバーのおかげであった。実行委員の皆さんにはここで改めて謝意を表したい。今回、私には阪神支部支部長、秋研究発表会実行委員長、会場校代表という3役が与えられており、またさらに語学ゼミナール委員長も担当しているために、懇親会での出番が非常に多くなったが、以上の欠点をそのときの働きで何とかカバーできていればと願う。

阪神ドイツ文学会もこのところ会員数の減少が大きな問題となっているが、秋学会の開催は「阪神ドイツ文学会もまだまだやれるぞ」という実感を与えてくれる機会であった。

宮下博幸（関西学院大学）